
Destino θ princess**番外編 姫君、雲下に落つ**

Lorex

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destino θ princess 番外編 姫君、雲下に
落つ

【Nコード】

N4054P

【作者名】

L o r e x

【あらすじ】

運命に導かれて下界へやってきたイヴ。彼女の過去が明らかに…
！

それは数百年に一度の皆既日食の日――。

「今日で1000日目、か」

長きに渡る大戦争。人々はわが国のためと出兵に赴くも帰ってこず。一体どれだけの人間が滅んだのか。どれだけの念がはびこっているのだろうか。兵の数はどの国もほぼ同じくらい。このまま争い続けても同士討ちになる。そうになると……この天界は確実の滅ぶ。

「王様！ お生まれに……っ！」

「なにっ、案内しろ！」

自国のためとは言うが、こんなやり方確かに間違っている。しかし戦争を終わらせるにはこの方法しかない。

「元気な女の子ですねっ」

予言のとおりだ。私らの始めの子は女が生まれ、その者は世界の犠牲者なりき。そういうことなのだろう、娘を捧げれば平和へ向かえる。

「あなた……これで」

「ああ、良くやった……」

妻は行き絶え絶えだ……。もうおそらくこの者も命はないだろう。だがそれは平和への犠牲だ。この生まれたばかりの赤子もそうである。

「跡継ぎはどうするのですか」

「平和になればそんなもの意味はないのだ。王族の血はここで途絶えることになるな」

そう、平和になれば王族なぞ無意味。それもまた幸せに必要な犠牲なのだ。

「さて……ウナを祭壇へ置いてくるがいい」

「はっ。ウナ様、こちらです」

皆が見守る中で、いよいよウナが女神への生贄となる。『運命の古文書』によればこれで太陽から平和への道標が送られるはずである。

ウナ、か……。適当に付けた名だ。どうせ生贄になるんだからな。しかし感情が育つ前に儀式が行えてよかった。彼女はちょうど昨日4歳になったばかりだ。これでいい――。

「王様、準備は整いました。あとはお捧げの言葉を」

「うむ。お前たちは下がってよい。何が起るか保障はできないからな」

ゆつくりと祭壇への階段を登り、太陽に向かって寝かせられる娘をしばらく黙視する。

「……………」

妻に似た純粋な瞳をした少女だった。しかしそんな物は生贄となるうえで必要だ……。

「――さあ、グリウンデの民よ。歓喜するがいい。

これより平和への道を開く――。」

「さあ女神よ……。この生贄を喰らい、すべての世界に平和をもたらせ――。」

そして…我らに平和を――。」

そうすべては平和のため。それに比べればこんなちっぽけな犠牲など……。

「おお……太陽が……」

「黒く——」

この時を待っていた。皆既日食というものだ。そして光り輝くダイヤモンドリングが顔を出す時——。

「さあ太陽よ！ 今こそその時ッ！」

民衆は雄たけびをあげる者、平和を喜ぶ者、歓喜して泣き喚く者。これが望んでいた結果だ……。

暗がりの世界は一瞬にして輝きだし、遙か上空には美しい光の環。

「美しい——、これが女神からの贈り物か」

「お、王様！ ウナ様の様子が……っ！」

見るとウナの全身がダイヤモンドリングのごとく光っている……。

「生贄となる時がきたようだな……。さらばだ、愛娘よ——」

「お……父さ、ま……っ」

「おおお……太陽が再び戻っていく」

これで全て終わった。明日には世界は平和になっているだろう。

「さて、わが国へ戻るぞ。もう出兵もしなくともよい。」

「はっ。……ウナ様の処置はいかにいたしましたしょう？」

「手厚く葬ってやれ。彼女へのせめてもの幸せだ」

「ううむ……」

どうしたことだ。出兵していた兵士が帰って来ない。

「王様、一旦落ち着かれて……。」

「う、うむ……そうだな」

玉座に腰を下ろすが、どうも心が落ち着かない。何かいやな予感がしてならない。しかし女神の儀式は終わったのだ、これから世界は癒えていくのだろう。

「……………っ!!」

おぞましい光景を見た。あれは夢か……。しかしなんて現実感……。…。

「……………疲れているのか、むむむ」

『あなたのやり方は間違っている……』

「!？」

急に枕元から声がした。女の声か？

「何者だ？ どうやって入った！」

『そうですね……あなたの、夢から。とでも言えば分かりやすいでしょうか？』

「夢から、だと？ ふざけた女だ、衛兵につまみ出される前にここから出て行くんだ」

しかしその声はどんどん近づいてくるようだった。振り向いてもその女の姿は見えない。

『あなたが捧げたこの生贄……。こんな麗しい少女を亡き者とするとは、その時点で平和なんてものはここにありません……。』

すると私の隣に静かに眠る少女。この姿は……！

「ウナ……だと!？」

『そう、この娘はウナと……。この子は最後まであなたを心配に思

つていたというのに……」

「まだこの子は4歳だ！ そんな感情……」

『感情というのは生まれた時点で存在します。——ウナは最後、泣きながら私の元へ来ましたよ？』

「……！」

私はいったい誰と会話しているんだ？ 忽然と姿を現した眠りに落ちたウナしかこの部屋にはいない。

『私は女神——、いつても信じないでしょうか。』

「女神……！？ な、なら早くこの世界を平和に！」

『運命の古文書、これが真実とは限りません。平和にするのは……』

「……？」

『あなた方、人々の仕事です。女神というのはそれを見守るだけの存在……』

「バカな！ こんな大戦争の真っ只中、誰が平和を促進するというのが！」

『……王はそんな人々を導くべきです。』

「……！」

『——今から私は、このウナに全てを捧げます。運命の古文書が書き換えられたその罰として。』

「ど、どうということだ！」

『あなたの愛娘、ウナは再び生命を受けるのです。彼女が女王となればきつと……』

「ウナが生き返るだと？ そなたはどうなるのだ」

『私の魂はここで絶えます。あなたもそれを思い出せなくなりましよう……』

「……」

『運命の古文書は、「運命の書」として地下の宝物庫に隠しなさい。もう書き換えられないように……』

「ウナが……この世界を平和に……？」

『ええ。そして人々は笑い合えるでしょう』

次の瞬間、部屋一面が光だし、ウナの中に何かが入っていく。

『この娘を……良心溢れる、皆から愛されるそんな少女に育て上げてください——、それが……平和——』

「……！」

……ウナを抱きしめながら眠っていたのだった。

「お父様、お呼びですか？」

「お来たな。ささこっちだ」

相変わらずメトスとは仲が良いみたいだな。腕なんて組みおつて

……。

「さ、二人ともうちの姫に挨拶しなさい」

志願兵の合格者二人。一人は剣術、もう一人は弓術に長けた幼き兵士だ。

「え、えつとー……こんにちわっ！」

「おいおいエルシア、相手は姫様だぞー？ もっと丁寧な挨拶しないと」

「むー、んじゃリジンやってみてよお」

この二人は……、いいコンビになりそうだ。いろんな意味で。

「この度、兵に志願しました。名はリジンと申します。以後お見知りおきを……」

「あ、う、うん……よろしくね」

リジンか、彼は優秀な兵士になるだろうな。

「ほえゝすごーいリジン、誰に習ったの？」

「ったく……ほらエルシアも」

「うんゝっ、よろしくね姫様ーっ」

「メトスよ、今日はお前に大事な話がある」
次期大臣候補のメトスになら任せられるはずだ。ウナは彼の中にあるのかもな……。

あれから数年の時間が過ぎた……。娘も大きくなり、王女としての自覚もしてきている。

「お父様、身体が冷えますから中へ……」

「……うむ、そうだな」

王族としての気品もあり、信頼もある。妻は死に子はウナ一人だが、間違いなく王位を授けられるだろう。そう、王女から女王へ。なんとと言っても、平和を導くのはあやつだけだからな。女神の生まれ変わり。それが我が娘だ。

「ねえお父様……」

「ん？ どうした」

「……メトスに休暇をあげて。最近疲れてるみたいなの」

「あいつはこの国の大臣。そう易々と休めるわけにもいかんが……」

「あとエルちゃんとリジンにも……、みんな休めてあげないと」
仲間のことを尊く考えるのは最もなことだが……。

「ほら、この間もメイドのシューさんが倒れちゃったし……」

「ふむ……、一斉に休ますことは出来ん。だがウナが言うならば……
……なんとかなるかもな」

「ほ、本当っ？ ありがとうお父様！」

そう言っつて、走って行ってしまった。ウナは自分よりも他人を尊

ぶそんな性格だからな。誇らしいこともある。

「エルちゃん、入るね」

兵士の訓練場。ここで沢山模擬勝負をして力をつけている模様。

「あつ、姫様」

「ゴメンね。忙しいのに」

「ううん、大丈夫だよ」

兵士長となったばかりのエルちゃんは緊張気味に兵士たちを鍛錬していた。最年少なのに実力は大人も顔負け。

「姫様、ここは危険ですよ？ 明日にでも出兵する兵士が鍛えてますから」

剣を磨いていたリジンもちちらへやってくる。リジンは副兵士長となったばかりだ。

「あなたたちに嬉しい知らせがあつて……」

「えーなにになに？」

「えっとね、エルちゃんとリジンに休暇を設けてもらったの。」

「休暇っ？ わーいつ！」

「この時期に休みですか、今こそ力を尽くさねば……」

リジンは相変わらずの武士心というか、騎士心というか。国のために尽くしてくれる。

「でもね、二人が出兵する前に少しでも休んでおかないと。疲れたまま行っても無駄死にしちゃうかも……」

「そーだよおりジン」せつかく姫様が取ってくれた休暇なんだからあ

「……すみません、姫様。ありがとうございます」

「いいの。兵士長さんと副兵士長さんだもんね、大変だから。」

エルちゃんはすっかり喜び、スケジュールを確認しに行った。

「リジンも、エルちゃんとデートしておいで？」

「んなっ、そ、そんな関係じゃありませんっ！」

「そうなの……？ でも2人すごく仲良いし……、城内でも評判だけどなあ」

そう言っていると、訓練していた兵士さんたちもクスクスと笑みをこぼしていた。

「こ、こらっ！ 笑うんじゃない！」

「だってーリジンさんの赤い顔見んの初めてなもんで」

「普段はクールなのにねえ、エルシアさんの事となるとこうだ」

「う、うるさいっ！」

ピリピリしていた訓練場もすっかり和やかな雰囲気になり、笑いが絶えなかった。

すっかり盛り上がりすぎて訓練場だけが夜でも明るかった。

「姫、少しはしゃぎ過ぎですよ」

「うう、……ゴメン」

みんなで盛り上がって、風に当たって一休みしていたところでメトスに見つかってしまったとお叱り中。

「しかしこの私まで休暇をお与え下さるとは……、姫の優しさには毎度頭が下がります」

「そんなことないよ、……メトスも疲れてるでしょ？」

「疲れてなんか……」

そうは言うけど、剣技も少し鈍くなってたしたまにフラつくのも見たことがある。

「……じゃあさ、明日一緒に城下町行こうよ。」

「ふ、二人で、ですか？」

「うんっ」

「しかし……城での勤めがある身で城下町に遊びに行くなど……」

「違うよー、ちょっと見たいものがあるからその護衛っ」

「護衛……」

「それなら、お仕事でしょ？」

「……………そうですね、わかりました……………」

「見たいものって……………」

六魔石の像。かつてこの世界を創造した神が人々のために残したという魔力が込められた石像だ。

「うん、何か昔からコレに惹かれててね……………」

「……………」

何かを感じる……………。この中から何か大きな力を。

「今ではすっかり観光地になってるんだね……………」

「そうみたいです、ね、よその国々からもコレを見るために来訪者が多数訪れるとか……………」

「へえ……………」

私とメトスは身分がバレないように庶民派変装をして城下町を観光してた。メトスには護衛ってことにしてあるけど……………。

「しかし……………そんな変装も似合うんですね……………」

「えっ？ あ、うん……………ありがとう……………」

「さまざまな国々から求婚の申し出が来るのも無理ないってものですよ。王様もこう仰ってましたし……………」

「そ、そっか……………」

敵国からも申し出があった。同盟して戦火を降ろそうという目的で。私はそれに少しだけ反対心があったけど国の平和のためならいいと思っていただけ……………。お父様はそう簡単に私を手放さない。姫様は大切にされてますから。そしてそれはグリユンデの民の気持ちでもあります……………」

「……………ね、メトス……………」

「はい」

「もし私が……ほかの国に嫁いじやったら、どうする？」

「えっ……？」

長い間ずっと幼なじみやってきたメトスならどうするだろう？

私が側から離れていたら。

「私は、永遠に姫のお側でお勤めさせていただくつもりです。たとえ嫁いでしまっても……」

「……そっか、ありがと」

夕闇に染まるまで、私はメトスと普段話せないことをたくさん話した。そういえばエルちゃんはどうなったかな……？

雷が鳴ってる。外は強い風が吹き荒れる。

「嫌な天気ですね……。洗濯物も干せないし」

「こんな日に花婿決めるなんて……。候補の者たちも来るのが大変だろうに」

今日は姫様の花婿を決める日。これまで何度も申請はあったけれど、今日で完全に決定するらしい。そ

の瞬間を見届けるべく兵士たちは王室に集結していた。私たちメイドも同じ状態。

「それでは……花婿候補の諸君。我が娘、ウナをこちらへ呼ぶ。最後に姫に気に入られた者がこの国に貢献する花婿となる。よいな」

王様の号令によって、綺麗な衣服を着た姫様が王室にやってきた。

「——おお……麗しい」

早速候補の一人が姫に近づいて、膝をつき頭を下げた。

「お、お父様……。私は花婿様なんて……」

姫様は王様の方をじっと見て、焦ったように言った。

「ウナよ、私はすぐにでもお前に王の座を即位してほしい。そのためには婿の存在は絶対だ。」

「……私は王の座なんていりません。みんなとこのまま暮らせればそれでいい」

「しかしだな、こんな嵐の中来た者々だ。このまま帰すわけにもいくまい。」

そう言われると、姫様は黙って王様の玉座に近寄り腰を下ろした。姫様はその優しく穏やかな心の持ち主だから、こんなにいろんな人に愛される。そんな優しい性格だから、この候補者たちを追い返せないんだろうな。

「さて、では姫へアピールを。」

そう言つと、一斉に候補者たちが立ち上がり姫に数歩寄る。

「……………」

「私はウェイド王国の王子、ハロルドと申します。姫のためなら火の中水の中……ぶつぶつ」

いかにも作り上げたセリフのような口文句で、姫は幾度困惑していた。

「姫様はどんな様子だ？」

「あ、メトスさん」

遅れてメトスさんがひよこつと現れた。姫の困った顔を見て少しメトスさんも困っていた。

「姫……お疲れなのにこんな花婿を選べだなんて」

「ふふ、心配なんですか？ だったら邪魔しちやえば？」

「な……そんなことしたら……」

そして日も暮れ、いよいよ花婿決定の瞬間が訪れた。

「さあウナよ、この3人の候補者の中から気に入った者を選ぶのだ。」

「

……………」

姫様は王に何か言いたげだが、それを必死に堪えてただ候補者の方を見る。

「——私には、心に決めた方がいます。その人の前で、花婿を選ぶなんて出来ません」

「なんと……」

心に決めた人……。姫様にそんな人がいたなんて……。

「……ウナ。その者は誰だ？ その名を口に出来るのならば、候補者は帰そう。」

「……………」

傍観者はみなじつと姫様の言葉を待つ。姫の心を虜にする人物……、それは誰なのか。

「——メ、メトス……、降りて来て。私が好きなのは……次期大臣候補のメトスです」

「……」

身体中に衝撃波が走ったように、自分の体はよろめく。

「まあ……、姫様ったら。メトスさん、姫様がお呼びですよ？ ふふふ……」

「姫様……………」

「……………」

王室の、王と姫のいるフロアに降りてきた。姫様は顔を真っ赤に染めて立ち尽くしている。

「メトスよ……。この候補者を差し置いてウナの好意を授かるとはな。やはり大臣候補でもある」

「王様……ッ」

黙って頭を下げ、しばらくそのままの姿勢になる。すると、暖かい手が差し出された。

「メトス、急にこんなこと言ってゴメン。……でも、私はメトスにずっと側にいて欲しいから——」

「姫……っ！」

その後、候補者であった3人は嵐の中虚しく自国へ帰っていった。しかし彼らの妬みの気持ちは感じられず、声を掛けると笑顔で答え

てくれた。

数日後、私メトスは王の勅命により遂に新たな大臣として側近に置かれるようになった。私の元のポジションであった兵士長の座は優秀な弓使いのエルシアが継いだ。未だに信じられない話だが。今日は大臣となつてはじめての姫との対面――。

「失礼します……、王様」

「うむ。似合つておるぞ、大臣」

すると、王の横にいた姫がこちらへ歩み寄りこつ言つたのだつた。

「これからも、私の一番近くにいてね……？」

姫のまぶしい笑顔が愛おしかった。

星空が綺麗な夜。幾つもの輝きは何度も瞬きを繰り返し、私を見下ろしていた。大きな三日月は微笑む口のように微笑みをこぼしていた。

「姫様、寒いから部屋戻つたほうがいいよ？」

「うん……」

兵士長となつたエルちゃんは可愛らしくも、また頼もしくも見えた。

「……ねえエルちゃん？」

「んーっ？」

「認めてくれて、ありがとね。私たちのこと」

メトスとの交際のウワサはわずかな時間で国全土に広まつた。エ

ルちゃんは私よりも少し前からメトスの事、気になってたみたいで……エルちゃんの恋路を邪魔しちゃったんだ。けれど彼女は……、
「もちろんだよっ、だって親友だもん♪」
「うん……ありがとう。……こっち来て？」
「ん……」

なんだか夜風に身体が冷えたのか、温もりが欲しくなった。

「わふっ!？」

エルちゃんの小さな身体をそっと抱き締めた。少しだけその小さな身体に力が入るのが分かった。

「……………エルちゃんの身体、暖かいね」

「んん、苦しいけど暖かい……………」

私より少しだけ低い肩。そこに私の顔をそっと置き、静かに目を閉じた。

「姫様……………」

メトスは、私の想いを受け入れてくれた。昨日だって二人で花火を見に行った。そんな彼は大臣の地位まで上り詰めたんだ。お父様もメトスのことはすごく気に入ってる。

「これからも……ずっと私の味方でいてね」

「えっ？ 当たり前だってばあ……………。何か今日の姫様変だよ？」

「……………変かもね……………。今日の私。」

だって明日から……………、

「——エルちゃん、明日から出兵でしょ？」

「あ、うん……………」

「嫌なウワサを耳にしたの。雷が落ちて、六魔石の像がバラバラに砕け散ったって……………」

「!」

あの像はこのグリウンデ王国の宝物だった。同時にあれはこの国を守る精霊が宿っていると信じられていた。その石像がバラバラに壊れてしまったということでは国中が少しながらパニックに陥ってい

た。

「絶対、無事で帰ってきて……。」

「うん！ 大丈夫、ボクこう見えて兵士長だもんっ！」

そう言つて一旦私の元から離れ、弓を掲げて見せた。

「ボクね、姫様の結婚式見るのが夢なんだっ……死んじゃった見れないもん。」

「エルちゃん……」

「それにボク一人じゃないし、リジンもいるし、他にも強い兵士さんもいっぱいネ」

「そうだね……、エルちゃん強いもんね。私、信じてるよ」

「うん！」

そしてこれを手渡す。昨日徹夜して作った、安全を願ったお守り。

「これは……？」

「みんなの安全を願って、昨日作ったんだよ。持ってたって」

「ありがと、大事にするね！」

そして私は次にリジンに会いに行つた。

「——ねね、リジン」

「姫様ですか……訓練場は危ないとあれ程……」

「またそんな冷たいこと言つてえ……。お守り作ってきたんだよ？」

リジンは相変わらず他人には少し冷たい。でもそこが惹かれるって言ってる女性陣も多い。

「ねっ？ 受け取って？」

「うっ……、わ、わかりましたよ。そんなにお近づきになられると……」

「あっ、ゴメンね……っ」

でも実は照れ屋さんで、いたずらに近づくと顔を赤くして離れようとする。

「これ、受け取って」

「……ありがとうございます。でも僕を使って遊ばないでくださいよ?」

「あ、あはは……。ゴメン……」
でも暖かいその眼は頼もしく素敵だった。メトスには負けるけどね……。

「姫様、王様がお呼びですぞ」
「あ、うん」

ゴレメさんが声を掛けてきた。明日のことかな……。それともメトスとのことについて何か言われるのかな。

「……ところで、明日は兵士たちをお送りになるのですかな?」

「うん、大事な日だもんね」

「メトスと二人きりになれますな、姫もお幸せ者で……」

「も、もう……からかわないでよお」

でも確かに、兵士の訓練を監視する必要もなくなるひと時だし……メトスも暇になるのかな。

「お城の兵士共々、姫のことは応援してらっしゃいますよ? もちらんこの私めもね。」

「あ、ありがと……。」

なんだか顔が熱くなってきて恥ずかしくなった。私はゴレメさんに一礼してお父様の元へ走って向かった。

「お父様、お呼びですか?」

「おお来たな。ささこちらへ……」

お父様の横にはメトスもいた。なんだか変な感じ……。まだ慣れない、この雰囲気。メトスが大臣だからかな。

「ウナ、私はお前に大事な話があつてここへ呼んだのだ」

「お、王様……。まさかあのお話を……?」

「うむ、悪いかの？」

な、なんだろ……？ メトスも少し顔が赤い。

「な、何のお話ですか？」

「ふふ……、お前たち。相当な両思いだそうじゃないか。私はな、メトスにならお前をやっても良いと思つとるんじゃない」

「……ええっ！」

「お、王様……っ、や、やはりまだ早うございませんか？ まだ姫にも心の準備が」

「はっはっは……何を言うか、さっきまで喜んでおったくせに」
その言葉にメトスは絶句してしまい大きく赤面していた。そ、それってもしかして……。

「率直に言おう！ お前たちの結婚を認める！」

「お、お父様……私たちはまだ結婚までは……」

「結婚「までは」……？ ということはそれ以前の事柄は済んだ、と？」

「おっ、お父様あゝっ」

私もつい照れ隠しにお父様を軽くペシペシと叩く。それにお父様はわっはっはと笑ってばかりだ。

「まあまあ、許可を下ろすまでさ。結婚を決めるのは2人で決めるのだな」

「………王様、少々お戯れが過ぎるのでは……」

「はっはっは、照れる二人が愛くるしくてのお」

お父様はいつにもまして笑顔だった。明日が出兵だとは思えないほど、愉快そうでなんだか私まで楽しくなっていた。

「……はあ、王様も楽しそうで良かったは良かったですね」

「あはは、でも楽しそうで良かったけどなあ。お父様のあんな笑顔見たの久しぶり」

「そうですね……、しかし結婚ですか」

いきなり話の確信をつかれて思いつきドキッとしてしまう。

「姫……、私はあの話。正直な所、本気にしてますよ……」

「ええっ！　も、もう……」

「姫様、私は、……あなた様をずっと」

「めっ、メトス……っ！」

急にメトスの腕に抱きしめられた。その力はどんどん強くなって、でも痛くない程。

「……………」

「な、何か言つてよ……」

「私の急な決断ですが……、私は姫のことをずっと守り続けたい。幼きころからずっと大好きですよ……」

「急すぎるよ……、相変わらず決定が早すぎるんだから。それで何回失敗した？」

「そ、それは……」

「……なんてね、私も同じくらいメトスが好きだったし。嬉しいよ」
その日は、忘れられない夜だった。星空の見守る空の下、私たちは長い間秘めていた想いを打ち明けた。

「んじゃ、行ってくるね！　姫様」

「うん、気をつけてね？　兵士長さん」

手を振って勇敢な兵士たちを見送る。

「では、私も今から用事があるので。また後で……」

「あ、うん……」

メトスも今日はお仕事みただ。やっぱり暇にはならないのかな……。

そして数週間、兵士たちは数人の犠牲を残して帰還した。今回

の出兵で、グリユンデの名は各地に轟き渡った。

そして私の結婚式の日も刻々と近づいていたのだった。

「……はあ」

「あれあれ、姫様？　どうかされました？　大好きなグラタンを残すなんて」

「うん……ちよっと胸がいっぱい……ね。ほら、式がもうすぐだから」

「あら、緊張してらっしゃるのね。メトス様も同じような顔してましたよ？」

「私、もう寝るね……。おやすみなさい」

「おやすみですーっ……」

なんだか身体が重い。どうも緊張のせいじゃない気がしたんだ。何か嫌な予感が……。

「はあ……変なの」

その日は普通に眠ろうと思っていた。しかし……、

ブウンツ……！　耳の奥が痛くなって、圧力が掛かったようにきゅつと締め付けられる。

『よオーっ、オレの声聞こえるかい』

「……っ！」

夜中、突然頭の中で声がした。なんだろう……？　なんだかおちやらけた声。

『だーれがおちやらけた声だよ？　オレ様の声はテノール歌手よりも美声だぞあ？』

「……あなたは誰？」

『ありやりや、な〜んか冷めてんなあ。明日の式、最高に仕上げたいんだろ？』

「……どうしてそれを知ってるの？　あなたは何者なの？」

『オレ様は、小悪魔ちゃんデューノ！ 覚えてかい？』

「デューノ……？ あなたはなぜ私の中にいるの？」

『いや……ってゆーかずつと君の中にいたんだけどよ。ほら、君って優しい性格だろ？ だから闇の部分が少なくってオレ様、表にでれなかつたってわけ。』

「私の闇の部分……？」

『そ、大きな光があればその影も大きくなるんだ。君の中には女神の魂と、このオレ様の小悪魔ちゃんの魂が宿ってるってわけ』

なんだかよくわからない人だなあ……。しかも夜中に……。

『あんた、オレ様に少し協力してくれよ。そしたら明日の結婚式、サイコーなものにしてやるぜ？』

「……悪魔の手なんか借りません。今すぐ私の心から出て行つて」
「かーっ、やつぱ普段は穏やかでも夜中は冷てえなあ。そこが、闇の部分だぜ？ お嬢ちゃん」

「……」
『な、オレ様な……君の声が欲しいんだよ。その綺麗な声がな……』

「声……？ そんなもの何に役に立つの？」

『へっへ……オレ様一人でテノールもソプラノも歌えるようになるだろっ』

「……すー……」

『あつ、ってオイ！ 人が話してる時くらい起きてろーっ』

「人、じゃないでしょ……？」

『うぐっ……そ、そこはいいじゃんか！ それより、その声だよー』

……欲しいなあ』

「声を失ったら、会話はどうすればいいんですか。私そんな不便な身体にしたいくないですし」

『……まゝオレ様、悪党じゃないから無理やりは奪わないよ。でも小悪魔ちゃんだからねっ？』

「……！ うぐっ……かはっ」

急にノドのあたりが痛んだ。この悪魔がやったのかな……。

「ん！？ い、今のはオレ様じゃないぞ？ 誰か忍び込んできやがった！」

「え……っ？」

すると、私の胸の辺りから光が漏れて部屋一面が眩く光った。

「ふう……追い出されちゃった。」

「……！ あなたが悪魔？」

「だ・か・ら！ オレ様は小悪魔ちゃんだったの！」

「……………」

「とにかく、今の君の中に何か邪悪な意思が入り込んだみたいだ……。恐らく俺たちの会話の間に隙ができたんだろう……」

「なんだか現実離れたよくわからない話だった。私疲れてるのかな……………」

「おいおい寝ようとするなよお」

「だ、だって……コレ夢かと思って」

「夢じゃねーよお、なんだったら自分のホッペでも叩いてみるよ」

ぺしっ……。痛い。

「な？ 夢じゃないんだ。」

「……な、何が起こってるの？」

「ここからはマジメな話な？ しっかり聞いてくれ」

急に顔色が変わった。

「……今、君の中にオレ様以上の悪魔が入り込んだみたいなんだ。その悪魔が君の身体を狙ってる」

「身体を……？」

「ああ、つまり肉体を乗っ取ろうとしてるってわけ。急展開だけだな、わかってくれ」

「なんだろう……、私の中で蠢く黒いもの。ノドのあたりにまだ痛みは残ってる。」

「……っ！ うあ……かはっ……！」
「だ、大丈夫か！ くっそ……オレ様の邪念を持つていったか……」
あまりの苦痛に悶え、その場に倒れこんだ。その後のことは覚えていない。

あの後どうなったのか覚えていない。変な悪魔が現れて、声をどうにかこうにか……とか言ってた。よく覚えていないし、よく分らなかった。とりあえず今日は待ちに待った……メトスとの結婚式だ。

「はあゝ姫様もついに結婚ですかあ。私、姫様の専属メイドでよかったですわ〜」

「………うん」

あれはなんだったんだろう？ 恐ろしい痛みが走ったのは鮮明に覚えている。

「はい、出来ましたわよ。綺麗なヴェールですこと……」

「ありがとう……」

なんだろう……？ 蠢く黒いものが以前よりもさらに激しく動いている。私の中に、一体なにが潜んでいるの……？ この間の変な悪魔も、住み着いてるのかな……。

「姫様、こちらです——」

手導きされ、私はメトスの待つ部屋に案内された。

「姫……お綺麗です……」

「……ありがとう」

メトスの手に捕まり、式が行われる教会まで歩く。周囲の視線は優しく穏やかだった。

けど……悲劇の幕開けはここからだっただ。

「……っ！ うぐっ……」

「姫？ どうかされましたか……？」

「な、なんでもないよ……」

本当はなんでもないことは無かった。またあの痛みがノドのあたりを突き刺したのだった。激痛に耐えながら、メトスの引く手について歩き続ける。

「くはっ……っ！」

セキが出て手で押さえようとすると、手に暖かい液体。赤みを帯びた――。

「ひ、姫様！ 血が……」

ノドの奥から血が飛び出した……！ それを見て、すごく怖くなった。

「救護班を呼べ！ 姫様が……！」

「うく……」

§

「……姫、こんな日に吐血してしまうなんて」

ぐったりとベッドに横たわって眠っている。そういえば最近、幾度首を押さえる仕草をしていた。

「……オレ様、こんなつもりじゃ無かったのになあ」

邪念だけが姫さんの中に残っちゃって、きっとそれを悪用された。誰だ、こんなことしたやつは？

「――貴様、姫の中にいた悪魔神だな」

「んなつ！ ……だ、誰だ！ それにオレ様は小悪魔ちゃんだ！」
「そんなことはどうでもいい。消え失せろ」

その邪悪に満ちた剣で、オレ様の身体はズタズタにされてしまっ

た。だが……心だけはまだ……！

「……心だけ逃れられると、思ったか。それも虚しく散るのだよ。」

「そ、それは死像……？　なんでグリユンデの兵士のあんたがそんなモノ……！」

「———終わりだ」

「あ……メトス様？」

「………姫の容態は？」

「とりあえずセキは落ち着きましたけど……、ずっとノドのあたりが痛いみたいで。今は眠ってますけど」

「そうか……。シユー、後は私が面倒見る。お前は仕事に戻ってくれ」

「はい……」

姫様の部屋を出る。すると、窓から何かがチラツと見えた。

「……あ、あれって！」

「ん、どうかなさいました？　シユーさん」

近くにいた兵士さんの望遠鏡を借りて、その何かが何なのか調べる。

「もしかして……、い、急いで王様に知らせて！　———邪神軍だわ！」

「邪神軍！？　い、今すぐ王の下へっ……！」

今まで様々な国が落とされたという、いったいどこから来るのかも分からない謎の軍隊。それが邪神軍だ。

「な、何っ！？　うぬぬ邪神軍め……こんな時に！　急いで優秀な

兵士を集めよ！ やつらをこの砦に近づけるなーっ！」

「はっ！」

おのれ……、ウナの大事なこの時期に……！ もしや、このタイミングを知っていたのか……？ 邪神軍は。

「メトス様っ！」

「なんだ、どうした！？」

「邪神軍が攻めてきました！ しかもかなりの人数を！」

邪神軍だと……、あの無差別殺戮集団か。城を攻めてくるだと…

…！？

「王様からの命令です！ 姫を安全なところに、と！」

「承知した、お主は城を頼む！」

そう言い放ち、姫を抱きかかえる。エルシアほどではないが小さなその身体は軽く持ち上がる。

「……まさか、邪神軍がこのことココを攻めに来るなんてね」

「ゴレメ殿！ あなたはご無事ですかっ？」

「ええ、……姫を安全な場所へ運びましょう。こちらへ……」

ゴレメ殿は、城の地下にある秘密通路へと私たち導いた。

「ここからまっすぐ行くと宝物庫がありますよね、そこには結界が張つてあるのでそこに……」

「ああ、助かった。ゴレメ殿は今からどこへ？」

「邪神軍はこの城にスパイを放っていたみたいでしてね。今からそやつらの始末です」

「——無事でな」

「ええ。そちらもね」

そして、宝物庫の鍵を開けて姫を結界の中に置く。そして私はその鍵を閉める。

「……姫、これは私の独り言です。」

姫は寝息を立てて眠っている。

「私にはあなたの本来の生き方があるんだと、そう思っています。」

私たちは結ばれるのはまだ早い。そうですね、この戦いが終わったら……その時こそ——」

聞こえてはいないだろうが、私は内に秘める思いを言った。そして、宝物庫を出る。

「なっ、こんなところにもう……」

「ケケケ……やっぱこの宝物庫の中みたいだぜ？」

「姫には近づかせん！」

長剣を抜き、次々と敵をなぎ払っていく。しかしその血から更なる生命が顔を出す。

「……！ これは……」

「メトス様っ！」

そのとたんあたりが雷鳴に包まれ、敵は一掃された。

「ゴレメ殿、邪神軍は……」

「ええ、やつらは何か特別な力を使ってここへ瞬間移動してきてますね。皆の方にも、ここにも大勢の敵軍が押し寄せてます……」

「姫には傷1つつけさせない。敵は全て討つ！」

「ええ。では、参りましょうか！」

ゴレメ殿は詠唱無しで大きな魔法を使える。その5本の指から龍のごとく大きな火炎が舞い、敵を焼き払う。

「……う……こ、ここは……？」

薄暗い部屋。ここは……宝物庫かな？

「うっ……ごほっ……」

ノドがすごく痛む……。昨日からずっとだ。なんだろう、この痛みは……。さつきも式前に吐血したような……。それで式は中止になったのかな。

「やっと目覚めたか……、愚かな姫君よ」

「……！ 誰……？」

『この声でわかりませんか？』

「……り、リジン……?」

間違いない、この低くまた暖かった声はリジンの声だ。でもな
んでここに……。

『ノドが痛むでしょう? あなたのの中に潜んでいた悪魔神がやった
のですよ』

「悪魔神……? デューノって悪魔のこと?」

『名前は存じませぬが……。あなたの声を欲しがっていた者です。』

——ま、そんなことはどうでもいいでしょう。』

すると、私の足元に張ってあった結界が解け、リジンが近づいて
くる。

「……っ! うぐっ……! な、何するの……? リジン」

首を強く捕まれた。息ができない……。

「私はあなたの声などいらぬ。あなたの力さえ手に入れば後はど
うでも良いですよ。」

「ど、どういうこと……?」

「私は……邪神軍のスパイなんです。それももう何年も前からね」

「嘘……、ど、どうしてそんな」

リジンが邪神軍のスパイ? だってリジンといえば城でも優秀で
女性陣にも評価ある人なのに……。

「恨むならあなたの運命を恨みな? ……女神の生まれ変わりです
もんね——」

その瞬間、自分の中から抑えきれない程のエネルギーが溢れ出た。
……目も開けられないほどの大きな光。

ゴゴゴゴゴゴ……、

「な、なんだ?」

突然の地響き。あれは宝物庫の方——。

「姫様に何かあったのかも知れぬですね。ここは任せて姫様のと
ころへ!」

「……頼んだぞ！」

ゴレメ殿を置いて、姫を閉じ込めていた宝物庫へ。

「……！ 姫様！」

宝物庫の前で、彼女は倒れていた。一体どうやって出たのだろうか、鍵もかかっていたのに。

「う、……メ、メトスう……」

「姫……っ？ な、何があつたのですか！」

「……………」

その後姫様は黙り込んでしまった。何があつたのだろうか？ さっきの地響きも……。

「これは……………」

姫様の左手に握られていたのは、『運命の書』。これが何かしたのだろうか……？ とりあえず、姫を安全な場所へ！

姫を抱えて、外へ飛び立つ。すると、外には多くの敵兵が。黒い羽を生やした兵士も見られる。あれが邪神軍か……。

「姫……、今安全な場所へ！」

「——あいつを打ち落とせ！！ 抱えているのが姫君だ！」

その号令と同時にたくさんの火矢が放たれる。左腕で姫を抱え、右手の長剣でそれをなぎ払い落としていく。これではキリが無い……。ふと、視線を遠くにやると馬小屋が見えた。姫の無事を考えるならば……、あそこしかないか。

「邪魔だぁーッ！！ 邪神軍どもめ、失せろ！」

飛び交っている敵軍を次々と打ち落とし、馬小屋の方へ飛ぶ。

「……ここなら絶対安全です。」

すると、姫がうわごとの様に口を開いた。

「メトス……、行か……ない、で——」

「姫、私とて城に仕える身です。城のために力を注ぐのは使命、当然姫を守ることね。……怖いでしょうが、ここなら敵も気づかな

いでしよう。私はずっと姫をこと——」

もはや言い残すこともあるまい。私は姫を置いて、馬小屋を出て行った。

「——滅せ！ 我が愛しき者の命を狙うものよ！ 今ここで貴様らを斬る！ 姫は……私が守る……！」

「うあつ……イテテ……」

「エルシア！ 大丈夫か？」

「あう、リジン……」

近くを飛んでいたリジンに救われて、人気の無い林の中に連れ込まれた。

「ここで休んでいる。馬小屋なら敵も気づかんだろう」

「うん……、リジンも気をつけてね」

リジンは羽を広げて、再び敵兵の方へ飛び去っていった。馬小屋か……。

「うづ……これじゃもう弓使えないよお……」

敵の炎の魔法で大事な弓の弦を焼かれてしまった。

「……んん？ だ、誰がいる？」

「——エルちゃん……」

「姫様！ だ、だいじょーぶ？ なんか血吐いたって……」

「う、うん……大丈夫……。ね、お願い、メトスの手助けしてあげて……。」

すると、姫様はボクの傷に触れて魔法を唱えた。

「わ、傷が治った……」

「お願い、頼んだよ……。兵士長さん」

その瞬間、馬小屋の建物が大きな音を立てた。爆発音……？

「……オイ！ ここにもいたぞーっ！」

ま、まずい……。敵兵だ……。ボクも姫様もボロボロなのに、このままじゃ……。

「オイ、さつさと増援を——ぎゃああつ——！」

「っ！ リジン！」

「俺は姫を連れてもつと安全な場所へ行く！ エルシアはメトスの護衛を！」

メトス……？ な、なんで呼び捨てなんだろう？ それよりも、早く行かなきゃ！

「——さて、ここでいいか」

姫の力は十分吸った。もう用済みだな……。

「この私が歌義理者だとは思わなかっただろうな。

……さて死像よ、

この少女の記憶をその身に封じよ——。」

死像の欠片。あの六魔像が砕けた時にできた魔石のひとつ。これを使えば人の生死はもちろん、運命をも左右できる代物だ……。

「……天界の者に見つかるゝ厄介だ。下界に落とすか……！」

地面の雲に大きな穴を開け、そこに姫を構える。

「……下界で達者でな。女神様——！」

姫の抜け殻は真つ逆さまに落ちていった。これでいい——、すべては邪神軍の手の中に——！！

ウナ姫の身体は、やがてその声を失ってしまった。そして記憶も死像の欠片に封じられてしまった。全てはグリユンデを裏切ったリジンという男の仕業。

これが……運命の少女、イヴの誕生でもあった。

「……あれ？ お、女の子だ……！ た、大変だよっ、村長様っ——！」

.

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
e
d
t
h
a
t
s
t
o
r
y
:
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4054p/>

Destino θ princess番外編 姫君、雲下に落つ

2011年3月30日16時10分発行